

家族環境に關与する家族成員のエゴグラム

永 田 忠 夫

Family Member's Egograms as Predictors of Family Environment

Tadao Nagata

問 題

家族環境に家族成員のパーソナリティが大きく關与していることは当然のことであるが、そのことを明白にするためには、家族環境をどのような次元で測定するのか、家族成員のパーソナリティをどんな検査で調べるのが妥当であるのか、被調査対象家族をどのように決めるのかななどの問題がある。調査的な家族の診断法は、Moos & Moos (1981) 以後 Olson (1983) や Bloom (1985) などがテストを作成して検討している。最近では家族療法の研究が増え、その検討をする方法として家族イメージ法や図示法などが案出されてきている。しかし多くの研究は、臨床的な場で事例的・記述的な方法でその関係を調べるのが中心になっている。そこで本研究では、家族環境と家族成員のパーソナリティとの関係を調べる手がかりとして探索的に資料の分析を試みた。

この研究では、家族環境を調査する尺度として、永田 (1985) が、Moos らが作成した家族環境尺度を基本にして作成し、尺度検討をおこなっている「青年を対象にした家族環境測定尺度」を使用した。

家族成員のパーソナリティ測定には、交流分析に用いられるエゴグラムを使用した。エゴグラムは、パーソナリティ構造を簡便でしかも個々人の性格のダイナミズムを重視した性格テストである。

家族成員 (父親・母親) のパーソナリティ測定には、青年が推測して評定したエゴグラムを使用した。家族成員のエゴグラムは、その家族成員自身で評価されるのが本来である。しかし、青年の日常生活の行動は、青年の認知した父親・母親像によって左右される。したがって、この研究では、青年自身の認知枠組の中での家族環境と家族成員との関係を分析することにし、父親・母親のエゴグラムは青年の推測による判定にもとづいて測定した。

家族を構成する成員全員のエゴグラムを収集するのが望ましいが、データ収集における制約

もあり、主要な家族成員として父親・母親・青年自身を取り上げた。

家族成員個々人と家族環境の関係、および主要な家族成員全員と家族環境との関係を調べることを目的とし、重回帰分析を用いて分析した。

方 法

1. 調査対象・分析対象・実施時期

調査は、女子青年として国・私立大学生、短期大学生、専修学校生 合計228名、男子青年として国立大学生 50名に対して実施し、分析の対象としたのは女子青年は213名、男子青年は47名であった。調査は、1988年6月～9月の間に実施された。

2. 測定尺度の構成

(1) 家族環境

永田（1985）が、Moos & Moos（1981）の家族環境尺度（FES）に基づいて、青年を対象にして作成した家族環境測定尺度の項目・尺度を使用した。その青年用の家族環境尺度では、尺度としての検討の結果、FESから独立性、道徳、宗教の強調が削除され、組織化・構造化志向と統制力が統合されて家族システムの維持尺度とされている。従って、本研究の家族環境測定の下位尺度は、以下のようである。

- ① 凝集性 ; 家族成員が相互にかかわりあい、援助しあい、支えあう程度。
- ② 感情表出性 ; 家族成員が包み隠さず振る舞ったり、自分の感情を直接に言い表すことが奨励される程度。
- ③ 葛藤表出度 ; 家族成員間であからさまに表現される怒り、攻撃、葛藤の量。
(家族成員間の葛藤という元の尺度名を本研究では略して葛藤表出度と記す)
- ④ 達成志向 ; 活動が達成志向とか競争という枠組みでなされている程度。
- ⑤ 知的志向 ; 政治的、社会的、知的、文化的活動への関心の程度。
(知的・文化的志向の略)
- ⑥ 社交性 ; 社会的、娯乐的活動への参加度。(社会的・娯乐的活動志向の略)
- ⑦ システム維持力 ; 家族で規則が作られ、その規則が家族成員を拘束している程度。
(家族システムの維持の略)

なお、評定尺度は、たしかにそうだ・まあそうだ・あまりそうではない・ぜんぜんそうではない、の4段階にした。

(2) エゴグラム

エゴグラムの測定には、種々のテストやチェック・リストが発表されているが、本研究では、杉田峰康（1985）のエゴグラム・チェック・リストを使用した。ただし、父親および母親のエ

ゴグラムについては、杉田のエゴグラム・チェック・リスト（成人用）の質問項目表現を青年が両親の考えを推測したり行動を評価しやすいように語尾をアレンジした。

3. 分析の手続き

分析対象選択には、年齢が18歳から22歳までの青年で、家族環境・父親のエゴグラム・母親のエゴグラム・私（青年自身）のエゴグラムの全質問項目へ回答がなされているものが抽出された。

データは、男女別に重回帰分析によって分析された。（統計的処理は、ソフトウェア：HALBAU（現代数学社）、ハードウェア：PC-9800UV を利用した。）

4. データの特質

家族環境下位尺度の平均と標準偏差の値を Table 1 に示した。

Table 1 家族環境尺度の平均値と標準偏差

(有意水準：*** $p < .001$)

家族環境・下位尺度	女子青年(213人)	男子青年(47人)	検 定
凝集性	11.52 (2.67)	11.75 (2.01)	
感情表出度	12.43 (2.21)	12.26 (1.68)	
家族成員間の葛藤	9.58 (2.65)	9.57 (2.48)	
達成志向	8.25 (2.08)	9.47 (1.71)	***
知的・文化的志向	9.22 (2.33)	9.62 (2.42)	
社会的・娯乐的活動志向	10.04 (2.36)	9.72 (2.38)	
家族システムの維持	10.64 (2.46)	10.47 (2.22)	

まず、本研究における男子青年のサンプルの少なさが分析の精度に大きく影響していることを考慮しておかねばならない。

家族環境に関するデータの特徴は、達成志向の平均値に女子青年と男子青年の間で0.1%水準で有意な差がみられたことである。女子青年を含む家族より男子青年を含む家族のほうが家族の達成志向が強いと見える。それは、男子青年が現代のような競争社会に送り込まれても生きぬいていけるパーソナリティを形成していくために、その形成の場としての家庭がその役割を大きく担っているからであろう。

各家族成員のエゴグラム平均は、Fig. 1 と Fig. 2 に示した。

エゴグラムに関するデータの特徴は、父親・母親の値が私に比して全体的に低く、特に男子青年のものが低いことである。自分の親についての他者評価や親の自己評価の推測は、青年にとって照れてしまって回答しにくいもののものであった。また、設問の仕方が「…あてはまる

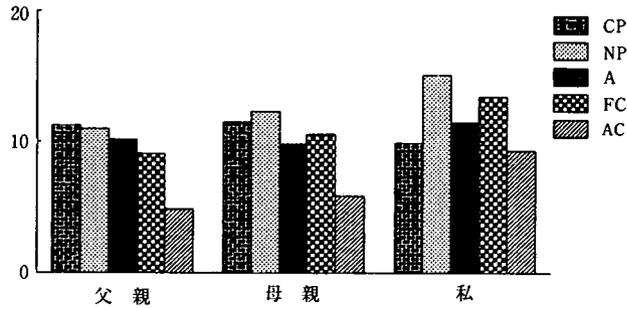


Fig. 1 エゴグラム—女子青年の平均値—

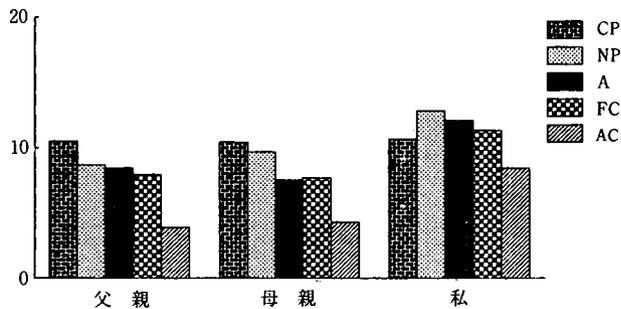


Fig. 2 エゴグラム—男子青年の平均値—

項目があれば○印を…」であったため、結果的に低い点数になったと考えられる。両親についてのエゴグラムの取り方は、設問の仕方、回答の仕方の工夫が今後の課題である。

結果と解釈

1. 家族成員個々人のパーソナリティ構造と家族環境

まず、家族成員である父親・母親・青年のパーソナリティ構造（エゴグラムで測定された自我状態の構造）が家族環境におよぼす影響力についての分析を試みた。

家族成員個々人のパーソナリティ構造全体が家族環境の下位尺度とどの程度の相関関係があるのか、それがどの程度の説明力があるのかをみるために、青年期にある子どもが推測した父親、母親および青年自身が自己評定（私）したそれぞれのエゴグラム下位尺度（CP・NP・A・FC・AC）を説明変数とし、家族環境の各下位尺度（凝集性、感情表出度、葛藤表出度、達成志向、知的志向、社交性、システム維持力）を目的変数とした総当たり法による重回帰分析をおこなった。家族環境下位尺度と家族成員各個々人のパーソナリティ構造との関係の強さ・説明力の指標として重相関係数とその説明率（寄与率）を算出した。

さらに、各家族環境の下位尺度を説明するのに、パーソナリティ構造のどの自我状態が説明

力のある有効な変数（自我状態）となるのか、また、その回帰式において抽出された各自我状態はどの程度の相関関係を持ち、どの程度の重要性をもつのかをみるために、F 値による減増法による重回帰分析を試みた。F 値による変数減増法における変数の選択・削除の基準値は、F = 2 を用いた。目的変数との関係の強さ・重要度の指標として、選択された説明変数のみの偏相関係数を算出した。

(1) 父親のエゴグラムと家族環境 (Table 2)

Table 2 家族環境の各下位尺度を基準変数とし、各家族員の自我状態を説明変数とした重回帰分析結果：重相関係数（説明率）

=父親= (有意水準：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

家族環境	女子青年の推測した父親のエゴグラム		男子青年の推測した父親のエゴグラム	
	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数
凝集性	.400(.160)***	NP : .311 *** CP : .180 ** AC : -.100 } .391 *** (.153)	.417(.174)	NP : .309 * .309 * (.096)
感情表出度	.261(.068) **	FC : .246 *** .246 *** (.061)	.471(.221) *	AC : -.343 * .451 ** FC : .341 * (.204)
葛藤表出度	.388(.151)***	A : -.196 ** CP : .167 * NP : -.160 * AC : .152 * } .378 *** (.143)	.530(.281) *	CP : .504 *** .523 *** A : -.410 ** (.273)
達成志向	.274(.075) **	AC : .215 ** NP : -.130 CP : .129 } .273 *** (.074)	.565(.319) **	CP : .496 *** .530 *** NP : -.302 * (.281)
知的志向	.288(.083) **	AC : -.170 * A : .156 * CP : .099 } .281 *** (.079)	.446(.199)	A : .344 * .344 * (.118)
社交性	.389(.151)***	FC : .287 *** AC : -.182 ** A : .142 * NP : -.107 } .338 *** (.151)	.384(.147)	CP : -.277 } .287 A : .208 (.082)
システム維持力	.397(.157)***	CP : .327 *** NP : .157 * } .390 *** (.152)	.301(.090)	A : .235 .235 (.064)

[女子青年の家族]

女子青年の推測した父親のエゴグラムと家族環境の認知との関係を総当たり法の重相関係数でみると、すべての下位尺度に有意な関係がみられた。説明力の強い順に、凝集性、システム維持力、社交性、葛藤表出度（以上重相関係数の有意水準 $p < .001$ ）、知的志向、達成志向、感情表出度（以上重相関係数の有意水準 $p < .01$ ）であった。この結果は、父親が家族成員の結合力（凝集性）に関与したり家族のシステム維持に関与し、家族員の求心的方向づけに対してある程度の役割をもつことを示している。社会に開かれた遠心的方向づけの役割としては、社交性（社会的・娯楽的活動志向）に関与しているが、知的志向や達成志向といった社会化された個人的な成長を促進する方向づけには、前者ほどには関与していない。また、家族成員間の情緒的な交流の面で、父親は家庭内において家族成員の欲求不満や葛藤の表出が自由になされる程度に影響をおよぼす。家族成員全体が自己開示のできる雰囲気づくりには、それほど関与していないように思われる。説明率（寄与率）は、最も高いのが凝集性の16.0%であり、最も低いのは知的志向で8.3%であった。

各家族環境の下位尺度に対して有効な説明力のある変数（自我状態）を抽出し、その相関関係をみるためにおこなったF値による変数減増法の分析の結果、次のようなことが明らかになった。（以下、F値による変数減増法の結果算出された重相関係数の大きい順に記述）

① 凝集性

家族の凝集性を説明するのに、父親のパーソナリティ構造のなかで、NP（養育的親の自我状態）、CP（批判的親の自我状態）、AC（順応した子どもの自我状態）が有効な自我状態として選択された。NPが最も凝集性との関連が深く（偏相関係数の有意水準 $p < .001$ ）、ついでCP（偏相関係数の有意水準 $p < .01$ ）であり、AC（*ns*）との間には負の偏相関係数がみられた。以上の結果から、家族の凝集性を高めるのに役割を果たす父親は、思いやりや共感的な態度と良心的で規律ある態度で他者と接するが、ちょっと頑固で融通のきかない父親像をもつと考えられる。

② システム維持力

家族システムの維持力を父親のエゴグラムで最も適切に説明するための回帰式を求めるために、CPとNPの2自我状態が選択された（それぞれの偏相関係数の有意水準 $p < .001$, $p < .05$ ）。凝集性と同じように親の自我状態が重要な要因であるが、家族のシステム維持力には、NPよりもCPすなわち父親の寛容さよりも厳しさが強く関与している。家族のシステム維持力を高める父親は、良心や理想を掲げ厳しく子どもをしつけるが、思いやりや援助的態度も時によって示す父親であると推測される。

③ 葛藤表出度

家族成員間で怒りや攻撃を表出しあうことに影響力をもつ父親のパーソナリティ構造は、A（大人の自我状態）、CP・NP・ACであり、FC（自由な子どもの自我状態）のみが取り除かれた。偏相関係数の有意水準は、A（ $p < .01$ ）、CP・NP・AC（ $p < .05$ ）であった。家族内で葛

藤表出度が高いのは、父親の非合理的であったり現実認識の歪んだ思考（Aと負の相関）を基にした批判的態度（CPと正に相関）や思いやりのなさ（NPと負の相関）、あるいは自主性のなさ（ACと正の相関）と関係していると考えられる。

④ 社交性

社会的・娯楽的活動志向には、父親のCP以外の自我状態が有効に関与している。偏相関係数の有意水準は、FC ($p < .001$), AC ($p < .01$), A ($p < .05$), NP (*ns*)であった。家族成員の社交性の高さに影響する父親は、我がままで遊び好き（FCと正の相関, ACと負の相関）だが他者と交流などでは意外にちゃっかりした面や知的好奇心の高い興味をもつ（FC・Aと正の相関）面もみられるパーソナリティと思われる。

⑤ 知的志向

知的・文化的志向を説明するのに有効な変数として父親のAC, A, CPの自我状態が選択された。偏相関係数の有意水準は、AC・A（以上 $p < .05$ ）, CP (*ns*)であった。クールで頭脳明晰な父親が家庭に知的志向をつくりだすと考えられる。

⑥ 達成志向

家族の達成志向には、父親のAC・NP・CPの変数が選択された。偏相関係数の有意性はAC ($p < .01$)のみにみられた。妥協的でタテマエを重んじて外的適応は良い（ACと正の相関）が他者に対して批判的で思いやりのかける（NPと負の偏相関係数値, CPと正の偏相関係数値）こともある父親が達成志向を高めると推測される。

⑦ 感情表出度

家族内における家族員の感情表出度は、自由奔放で天真爛漫な（FC）父親と深く関係している。

[男子青年の家族]

男子青年の推測した父親のエゴグラム全変数と家族環境の関係を偏相関係数で検討してみると、達成志向に対してよい説明力があり（偏相関係数の有意水準 $p < .01$ ）、感情表出度と葛藤表出度にも有意な関係がみられた（偏相関係数の有意水準 $p < .05$ ）。家族内における父親を男子青年は、現代の競争社会へ送り込む（その意味で息子を社会化させる）原動力となる人と感じる一方、情緒面で父親が社会生活で受ける緊張を家庭内で発散しようとしている現実も認知していると考えられる。説明率の最も大きい数は達成志向の31.9%であった。

F値によると変数減増法で分析した結果は次のようであった。

① 達成志向

家族の達成志向をもたらす主要な父親の自我状態を、男子青年はCP, NPであると認知している。CPとは有意な水準 ($p < .001$) で正の相関, NPとは有意な水準 ($p < .01$) で負の相関があった。子どもを過保護にはしない厳しさや批判的な態度をもつ父親が、家族の達成志向に関与している。

② 葛藤表出度

家族内の葛藤表出度は、父親の CP, A に規定される。葛藤表出度は、父親の CP と正の相関があり ($p < .001$)、A と負の相関がある ($p < .01$)。父親の現実認識が悪く、独断と偏見による判断 (CP と正の相関, A と負の相関) が家族内の葛藤表出度を高める。

③ 感情表出度

家族内でお互いに自分の感情を包み隠さず表出できる雰囲気は、父親の自我状態が AC 的でなく (負の相関, $p < .05$)、FC 的である (正の相関, $p < .05$) ことに規定される。我がまま勝手な行動のみられる父親が家庭の自己開示的な雰囲気を醸し出す。

④ 知的志向

家族の知的志向性は、父親と A との間に、正の相関 ($p < .05$) がみられた。

⑤ 凝集性

家族の凝集性と父親の NP との間には、正の相関 ($p < .05$) がみられた。

(2) 母親のエゴグラムと家族環境 (Table 3)

[女子青年の家族]

女子青年の推測した母親のエゴグラムと家族環境の認知との間の関係を総当たり法で分析すると、説明力の強さは、システム維持力、達成志向、葛藤表出度、社交性、感情表出度 (以上偏相関係数の有意水準 $p < .001$)、凝集性 (偏相関係数の有意水準 $p < .01$)、知的志向 (偏相関係数の有意水準 $p < .05$) の順で、すべての下位尺度の偏相関係数が有意であった。母親の存在は、家族環境のシステム維持 (お互いに約束事を守ることについてのしつけ) に最も関与し、家族員の達成志向や社交性を助長して個人の社会的な (世俗的な) 成長を計り、家族員の相互的なかわりにおいては、互助的な関係より情緒的・感情的な表出ができるような雰囲気づくりに寄与しているようである。説明率は、25.9% から 5.8% の範囲であった。

F 値による減増法で分析した結果は次のようであった。

① システム維持力

家族員のシステムを維持する力を説明するのに有効な母親のエゴグラムを抽出してみると、NP が除かれ、CP, AC, FC, A が選択された。CP とは正の相関 ($p < .001$)、AC とは負の相関 ($p < .01$) がみられたが、FC・A とは有意な水準の相関ではなかった。女子青年は、融通が利かなく規則を決めたらそれを頑固に守らせるために懲罰的態度にでる母親が家族のシステム維持に貢献していると認知している。

② 達成志向

達成志向に関与する母親の自我状態は、AC, NP, CP である。AC・CP とは正の相関 (それぞれの有意水準 $p < .001$, $p < .01$)、NP とは負の相関 ($p < .001$) がみられた。家族の達成志向に母親の一見タテマエを重んじて穏やかで友好的態度で外的適応は良いが、他人に対して批

判的で思いやりに欠ける自我状態が關与しているといえる。

③ 葛藤表出度

家族の葛藤表出性に関与する母親のエゴグラムは、AC, NP, Aである。ACとは正の相関 ($p < .001$), NP・Aとは負の相関 (それぞれの有意水準 $p < .01$, $p < .05$) がみられた。家族の葛藤表出度を高くする母親のパーソナリティ構造は、自分に自信がもてなく、他人との温かい交流がもてず、物事に対しても客観的にみれない性格が寄与している。

④ 感情表出度

家庭内での感情表出度に関与する母親のエゴグラムは、AC, FC, NPである。ACとは負の相

Table 3 家族環境の各下位尺度を基準変数とし、各家族員の自我状態を説明変数とした重回帰分析結果
：重相関係数 (説明率)

=母親= (有意水準：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

家 族 環 境	女子青年の推測した母親のエゴグラム		男子青年の推測した母親のエゴグラム	
	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数
凝 集 性	.288(.083) **	NP : .208 ** AC : -.161 * CP : .108 } .285 *** (.081)	.401(.161)	NP : .351 * AC : -.266 } .387 * (.150)
感 情 表 出 度	.331(.110) ***	AC : -.253 *** FC : .159 * NP : .098 } .326 *** (.106)	.300(.090)	AC : -.218 } .218 (.048)
葛 藤 表 出 度	.357(.128) ***	AC : .228 *** NP : -.183 ** A : -.144 * } .347 *** (.121)	.442(.195)	A : -.364 * AC : .296 * CP : .269 } .421 * (.178)
達 成 志 向	.410(.168) ***	AC : .305 *** NP : -.232 *** CP : .207 ** } .407 *** (.165)	.520(.271) *	CP : .391 ** NP : -.266 AC : .230 } .518 ** (.268)
知 的 志 向	.241(.058) *	AC : -.172 ** NP : .148 * } .208 ** (.043)	.393(.154)	CP : .323 * AC : -.228 } .342 (.117)
社 交 性	.332(.111) ***	FC : .264 *** AC : -.179 ** CP : -.098 } .321 *** (.103)	.197(.039)	
システム維持力	.509(.259) ***	CP : .449 *** AC : -.177 ** FC : -.125 A : .107 } .509 *** (.259)	.428(.183)	NP : .349 * CP : .263 AC : -.210 } .425 * (.180)

関 ($p < .001$), FC とは正の相関 ($p < .05$) がみられた。母親の我がままで自由奔放な態度が、家族の感情表出度を高めると推測される。

⑤ 社交性

家族成員の社交性を説明するのに有効な母親の自我状態は、FC, AC, CP であった。FC との間には正の相関 ($p < .001$) が、AC との間には負の相関 ($p < .01$) がみられた。我がままで遊び好き (FC と正の相関, AC と負の相関) な母親が、家族の社会的・娯楽的志向を助長する。

⑥ 凝集性

家族の凝集性を説明する有効な母親の自我状態は、NP, AC, CP である。NP とは正の相関 ($p < .01$), AC とは負の相関 ($p < .05$) がみられた。自分の考えでてきばきと他者の面倒をよくみる母親が家族の凝集性を高めていると考えられる。

⑦ 知的志向

家族の知的志向を高めるのに関与する母親の自我状態は、AC と NP である。AC とは負の相関 ($p < .01$), NP とは正の相関 ($p < .05$) がみられた。主体性があり、許容量のある母親が知的志向を高められると思われる。

[男子青年の家族]

男子青年の推測した母親のエゴグラムによって家族環境を説明するときの説明力をみるために総当たり法の偏相関係数を算出した。その結果、達成志向のみに有意な偏相関係数がみられた ($p < .05$)。母親のパーソナリティ構造が家族環境に関与する側面は、家族成員の活動が達成とか競争という枠組みでなされるようにすることである。説明率は、達成志向の27.1%が最も高かった。

F 値による変数減増法によって母親のエゴグラムのうち説明力の有効な自我状態を抽出した。

① 達成志向

達成志向を説明するのに有効な母親の自我状態として、CP, NP, AC が選択された。そのうち、CP のみに偏相関係数の有意性がみとめられた ($p < .01$)。母親の理想を追求するような態度や他者への厳しい要求が家族の達成志向を高める。

② システム維持力

家族システムを維持するのに関与する母親の自我状態として NP, CP, AC が抽出された。そのうち、NP とは正の相関がみとめられた ($p < .05$)。家族システム維持のためには、母親の母親らしい温かさが有用である。

③ 葛藤表出度

家族の葛藤表出度を説明するのに有効な母親の自我状態として、A, AC, CP が抽出された。A とは負の相関関係が ($p < .05$), AC とは正の相関関係が ($p < .05$) みとめられた。理性的で客観的な判断ができず、主体性のない他者に気がついた態度の母親は、家族の葛藤表出度を

高めると考えられる。

④ 凝 集 性

凝集性を説明するのに有効な母親の自我状態として NP, AC が選択された, NP との間には, 有意な正の相関がみられた ($p < .05$)。システム維持力と同様に家族の相互援助関係を保つには, 母親の優しい温かさが必要であると考えられる。

(3) 私 (青年自身) のエゴグラムと家族環境 (Table 4)

Table 4 家族環境の各下位尺度を基準変数とし, 各家族員の自我状態を説明変数とした重回帰分析結果
: 重相関係数 (説明率)

= 私 (青年自身) = (有意水準: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

家 族 環 境	女子青年のエゴグラム		男子青年のエゴグラム	
	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数
凝 集 性	.332(.110) ***	CP ; .222 *** NP ; .143 * A ; .101 } .327 *** (.107)	.660(.436) ***	A ; .421 ** NP ; .373 ** } .636 *** (.404)
感情表出度	.248(.061) *	CP ; .135 * AC ; -.117 FC ; .117 } .244 ** (.060)	.537(.288) **	NP ; .374 ** AC ; -.261 } .510 *** (.260)
葛藤表出度	.251(.063) *	FC ; .194 ** NP ; -.162 * AC ; .104 } .243 ** (.059)	.280(.078)	
達成志向	.378(.143) ***	AC ; .338 ** CP ; .152 * FC ; .147 * } .373 *** (.139)	.337(.113)	AC ; .258 .258 (.066)
知的志向	.320(.103) ***	FC ; .257 *** A ; .153 * } .307 *** (.094)	.515(.265) *	FC ; .370 ** CP ; .351 * } .470 ** (.221)
社 交 性	.301(.091) ***	FC ; .199 ** AC ; -.132 * A ; .096 } .299 *** (.090)	.368(.135)	NP ; .300 * .300 * (.090)
システム維持力	.481(.231) ***	CP ; .367 *** NP ; .191 ** A ; .129 } .476 *** (.226)	.513(.264) *	CP ; .265 NP ; .257 } .473 ** (.223)

[女子青年の家族]

女子青年が自己評定したエゴグラムを説明変数とし自分の家族の環境を目的変数とする重回帰分析の総当たり法の結果、すべての家族環境下位尺度に有意な重相関係数をみいだす回帰式が算出された。説明力の高い順に、システム維持力、達成志向、凝集性、知的志向、社交性（以上重相関係数の有意水準 $p < .001$ ）、葛藤表出度、感情表出度（以上重相関係数の有意水準 $p < .05$ ）であった。家族環境のうち葛藤や感情の表出度の説明力がやや落ちるが、それ以外の家族員の結合力や個人的成長への志向性には女子青年自身が關与しているといえる。説明率は、23.1%（システム維持力）から6.1%（感情表出度）の範囲であった。

各家族環境下位尺度に対して説明力のある女子青年の自我状態を抽出するためのF値による変数減増法の結果は次のようであった。

① システム維持力

システム維持力を説明するために有効な女子青年の自我状態として、CP, NP, A が抽出され、それぞれの偏相関係数の有意水準はCP ($p < .001$), NP ($p < .01$), A (ns) であった。CP・NP いずれにも正の相関を示した。女子青年の親的自我状態つまり指導力や面倒みのよさが家族のシステム維持力を高めている。

② 達成志向

家族の達成志向を説明するための有効な女子青年の自我状態は、AC（偏相関係数の有意水準 $p < .001$ ）、CP・FC（偏相関係数の有意水準 $p < .05$ ）であった。いずれも正の相関であった。いやなことにも忍耐し（AC 高い）、時として批判的で感情的になる（CP・FC も高い）女子青年が家族の達成志向を高める。

③ 凝集性

家族の凝集性に關与する女子青年の自我状態は、CP, NP, A で、偏相関係数の有意水準がCP ($p < .001$), NP ($p < .05$) で、いずれも凝集性との間に正の相関関係を示した。システム維持力と同じパターンである。

④ 知的志向

家族の知的志向を女子青年のエゴグラムで説明するのに有効な自我状態は、FC と A であり、いずれも正の相関関係（偏相関係数の有意水準はそれぞれ $p < .001$, $p < .05$ ）があった。家族の知的志向の強さを規定するのは、女子青年の理性的で創造的な知的好奇心であるといえる。

⑤ 社交性

家族の社会的・娯楽的活動志向の強さは、女子青年のFC, AC, A の自我状態が有効な説明力をもつ。FC とは正の相関 ($p < .01$), AC とは負の相関 ($p < .05$) がみられた。女子青年の他人に氣を使わない自由奔放さが家族成員の社交性を助長すると考えられる。

⑥ 感情表出度

家族の感情表出度はエゴグラムのCP, AC, FC の自我状態で説明できる。ただし、偏相関係数の有意水準のある変数はCPのみ ($p < .05$) であった。女子青年の齒に衣を着せない非難や

主張の表出が家族の感情表出度を高めると推測される。

⑦ 葛藤表出度

家族の葛藤表出度に関与する女子青年の自我状態は、FC, NP, ACであり、FCは正の相関 ($p < .01$)、NPには負の相関 ($p < .05$) がみられた。家族の不満や攻撃の表出は、女子青年の他者に対する思いやりに欠ける我がままさに関係していると考えられる。

[男子青年の家族]

男子青年の自己評定によるエゴグラムを説明変数とし、家族環境を目的変数とする重回帰分析の総当たり法の結果、家族環境下位尺度を説明するのに有意な重相関係数をみだしたのは、説明力の高い順に、凝集性 (重相関係数の有意水準 $p < .001$)、感情表出度 (重相関係数の有意水準 $p < .01$)、知的志向、システム維持力 (以上重相関係数の有意水準 $p < .05$) であった。家族環境の凝集性、感情表出度さらにシステム維持力といった身内意識を育てるような家族の求心的志向性に男子青年が関与しているように思われる。また知的志向性にも男子青年自身が関与している。説明率は、凝集性の43.6%が最も高かった。

F値による変数減増法の結果は次のようになった。

① 凝集性

家族の凝集性を有効に説明できる男子青年の自我状態を選択すると、A, NP (いずれも偏相関係数の有意水準 $p < .01$) が抽出された。男子青年の状況を適切に把握した他者への思いやりのある態度が家族の凝集性を高めると思われる。

② 感情表出度

家族の感情表出度には、男子青年のNPとACが関与している。NPとの間には正の相関係数がみられた ($p < .01$)。男子青年の思いやりのある交流の仕方が家族の感情表出度を高めると推測される。

③ システム維持力

家族のシステム維持力を有効に説明する男子青年の自我状態を抽出すると、CPとNPが選択された。しかしいずれも単独では有意な水準の偏相関係数をもたなかった。

④ 知的志向

家族の知的志向に関与する男子青年の自我状態は、FC, CPで、偏相関係数の有意水準はFC ($p < .01$)、CP ($p < .05$) であった。自由で行動力をもつが独善的な面もある男子青年が家族の知的志向性を高める。

⑤ 社交性

家族の社会的・娯乐的活動志向は、男子青年のNPとの間に正の相関があった ($p < .05$)。男子青年の他者への寛大さややさしさが関与していると推測される。

2. 主要な家族成員（父親・母親・青年）全員のパーソナリティ構造と家族環境

家族成員個々人のパーソナリティ構造と家族環境についての検討ではなく、ここでは主要な家族成員（父親・母親・青年期にある私の3名に限定）全員のエゴグラム下位尺度（各自のCP・NP・A・FC・AC）15要因を説明変数とし、家族環境下位尺度を目的変数とした重回帰分析をした。家族成員個々人の分析では、個々人のパーソナリティ構造がどの程度家族環境が影響力をもち、各個々人のどの自我状態が家族環境を適切に説明できるかが分析された。しかし、この分析方法では家族を構成する成員のパーソナリティ構造間の関与度が取り扱われていない。そこでここでは、家族成員のパーソナリティ構造全体が、家族環境にどの程度関与しているのか、家族環境を説明するのに主要な家族成員（父親・母親・青年）全員の誰のどの自我状態が深く関与しているかを明らかにすることを目的とした分析をおこなった。分析は、個々人の場合と同じく重回帰分析（総当たり法およびF値による減増法）を用いた。

[女子青年の家族] (Table 5)

女子青年の場合、総当たり法の結果として家族環境の全下位尺度に有効な説明力があることがわかった。重相関係数の大きい順に、システム維持力、社交性、凝集性、葛藤表出度、知的志向、達成志向、感情表出度（いずれも重相関係数の有意水準 $p < .001$ ）であった。説明率は、システム維持力の40.9%から感情表出度の18.1%の範囲であった。

F値による変数減増法の分析の結果は、次のようであった。

① システム維持力

システム維持力を各家族成員のエゴグラム全部で説明しようとするとき、有効な説明変数を選択すると、母親・私・父親のCPおよび母親のFC・AC、私のAC・A、父親のNPであった。0.1%水準で有意な偏相関係数を示した変数は、母親CP、私CPであり、1%水準では、父親CP、母親FC・ACであり、5%水準では、私ACであった。家族のシステム維持力を強めるのに寄与するのは、家族成員全員の自己にも他者にも厳格で批判的な自我状態である（成員各自のCPと正の相関）。また、それに加えて母親の子どもの自我状態が小さくて几帳面で気楽でない態度（FC・ACと負の相関）や女子青年の頑固さが家族システムの維持に寄与するようである。

② 社交性

社交性を適切に説明するために抽出された家族成員の自我状態は、父親のFC・A、母親のAC・CP・NP・A、女子青年のFC・AC・Aの9変数である。有意な偏相関係数を示した変数は、父親のFC（正の相関 $p < .001$ ）、私のFC（正の相関 $p < .05$ ）、母親のAC・CP（負の相関 $p < .05$ ）であった。家族の社会的・娯乐的活動志向を助長するのは、明るく活動的な父親と女子青年、それに過剰適応の傾向のある母親の組み合わせが推測される。

③ 凝集性

家族の凝集性を家族成員のパーソナリティ構造で説明するのに適切な変数は、父親のNP・

Table 5 家族環境の各下位尺度を基準変数とし、各家族員の自我状態を説明変数とした重回帰分析結果：重相関係数（説明率）

=女子：213名= (有意水準：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

家族環境	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果	
		エゴグラム・偏相関係数	重相関係数
凝集性	.518 (.268) ***	私 : CP ; .278 *** 母親 : A ; -.190 ** 父親 : NP ; .179 ** 父親 : FC ; .143 * 母親 : AC ; -.128 父親 : A ; .127 母親 : NP ; .117 私 : A ; .106	.506 *** (.256)
感情表出度	.426 (.181) ***	母親 : AC ; -.245 *** 父親 : FC ; .244 *** 私 : CP ; .190 ** 母親 : A ; -.124 母親 : NP ; .122 私 : FC ; .118	.414 *** (.171)
葛藤表出度	.478 (.229) ***	父親 : A ; -.234 *** 私 : FC ; .197 ** 父親 : CP ; .197 ** 母親 : NP ; -.184 ** 父親 : AC ; .165 * 母親 : CP ; -.135 母親 : AC ; .099	.458 *** (.210)
達成志向	.461 (.212) ***	母親 : AC ; .219 ** 私 : AC ; .216 ** 母親 : CP ; .148 * 母親 : NP ; -.130 私 : CP ; .122 私 : FC ; .110 私 : NP ; -.102	.444 *** (.197)
知的志向	.470 (.221) ***	私 : FC ; .266 *** 父親 : CP ; .205 ** 母親 : AC ; -.202 ** 父親 : NP ; .171 * 母親 : CP ; -.165 * 私 : A ; .125	.439 *** (.192)
社交性	.522 (.272) ***	父親 : FC ; .276 *** 私 : FC ; .179 * 母親 : AC ; -.155 * 母親 : CP ; -.143 * 母親 : NP ; .125 私 : AC ; -.121 母親 : A ; -.116 父親 : A ; .116 私 : A ; .106	.504 *** (.254)
システム維持力	.640 (.409) ***	母親 : CP ; .320 *** 私 : CP ; .252 *** 父親 : CP ; .224 ** 母親 : FC ; -.182 ** 母親 : AC ; -.181 ** 私 : AC ; -.144 * 父親 : NP ; .129 私 : A ; .120	.629 *** (.396)

FC・A, 母親のA・AC・NP, 私のCP・Aの8変数であった。有意な偏相関係数を示した変数は、私のCP (正の相関 $p < .001$), 母親のA (負の相関 $p < .01$), 父親のNP・FC (正の相関それぞれ $p < .01$, $p < .05$) であった。規律正しい生活のできる女子青年と感情的な母親と明

るく世話好きな父親の組み合わせが家族の凝集性をつくりだすと考えられる。

④ 葛藤表出度

お互いに自分の欲求不満や攻撃エネルギーを家庭内で発散することのできる程度を示す葛藤表出度を説明するのに有効な変数は、父親の A・CP・AC, 母親の NP・CP・AC, 私の FC の 7 変数であった。有意な偏相関係数を示した変数は、父親の A (負の相関 $p < .001$), 父親の CP (正の相関 $p < .0.$), 父親の AC (正の相関 $p < .01$) と母親の NP (負の相関 $p < .01$) および私の FC (正の相関 $p < .01$) であった。葛藤表出度の高い家族成員のパーソナリティ構造の特徴は、自他否定的で他人との温かい交流がもちにくく建設的な人生態度がもちにくい父親と他人に対する思いやりに欠ける母親と自由奔放な女子青年の組み合わせのようである。

⑤ 知的志向

家族の知的志向に関与する重要な家族成員の自我状態は、父親の CP・NP, 母親の AC・CP, 私の FC・A の 6 変数である。有意な偏相関係数を算出した変数は、父親の CP (正の相関 $p < .01$), 父親の NP (正の相関 $p < .05$), 母親の AC (負の相関 $p < .01$), CP (負の相関 $p < .05$) および私の FC (正の相関 $p < .001$) であった。家族の知的志向性を高めるのは、父親の優しさや厳しさをもった親的な自我状態と母親の現実肯定的で現実順応的な態度、そして女子青年の自由で行動的な性格と考えられる。

⑥ 達成志向

家族成員の達成志向を説明するのに適切な家族成員の自我状態として、母親の AC・CP・NP, 私の AC・CP・FC・NP が抽出された。母親の AC・CP との間に正の相関 (それぞれ $p < .01$, $p < .05$) が、私の AC との間に正の相関 ($p < .01$) がみとめられた。母親も女子青年もクールで人との交流にあまり関心を示さない態度が、家族の達成志向を助長していると推測される。

⑦ 感情表出度

家族の表出度を説明するのに有効な家族成員の自我状態として、父親の FC, 母親の AC・A・NP, 私の CP・FC が選択された。父親の FC との間に正の相関 ($p < .001$) が、母親との AC との間に負の相関 ($p < .001$) が、私の CP との間に正の相関 ($p < .01$) がみられた。父親が自由に振る舞い、母親が主体性をあまりもたず、女子青年が家庭内を取り仕切っている雰囲気の家は、感情表出度が高いと思われる。

[男子青年の家族] (Table 6)

男子青年を含む家族の家族環境を家族成員全員のパーソナリティ構造で説明するために総当たり法の重回帰分析の結果、重相関係数が有意であった尺度は、達成志向 ($p < .01$), 知的志向・葛藤表出度 (いずれも $p < .05$) であった。男子青年にとって、家族成員が関与している家族環境は、個人的成長志向や社会で自立した人として社会化させる達成志向・知的志向であり、また、家族員の葛藤を発散するところでもあると認知しているようである。

F 値による変数減増法の分析の結果は、次のようであった。

Table 6 家族環境の各下位尺度を基準変数とし、各家族員の自我状態を説明変数とした重回帰分析結果：重相関係数（説明率）
 =男子：47名= (有意水準：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

家族環境	総当たり法の結果 重相関係数	減増法による結果 エゴグラム・偏相関係数・重相関係数
凝集性	.699 (.489)	私 : NP ; .414 ** } .633*** 私 : A ; .392 ** } (.401)
感情表出度	.591 (.350)	私 : NP ; .386 ** } .558 ** 父親 : FC ; .282 } (.312) 父親 : AC ; -.277
葛藤表出度	.709 (.503)	父親 : CP ; .540 *** } .632*** 母親 : A ; -.368 * } (.399) 私 : AC ; -.293 父親 : A ; -.250 母親 : CP ; .224
達成志向	.781 (.610)	父親 : CP ; .628 *** } .744*** 私 : A ; .455 ** } (.553) 母親 : NP ; -.437 ** 父親 : AC ; .381 * 父親 : NP ; -.336 . 私 : CP ; .260 .
知的志向	.737 (.544) *	父親 : AC ; .517 *** } .725*** 父親 : A ; .432 ** } (.526) 父親 : NP ; -.406 * 母親 : FC ; -.340 * 私 : NP ; .336 * 私 : A ; .269 父親 : FC ; .265 私 : FC ; .241 母親 : AC ; -.239
社交性	.585 (.342)	私 : NP ; .344 * } .494 * 父親 : NP ; -.297 } (.244) 父親 : CP ; -.286 父親 : A ; .230 父親 : AC ; .217
システム維持力	.680 (.462)	私 : CP ; .372 * } .616*** 母親 : NP ; .364 * } (.379) 父親 : NP ; -.362 * 私 : A ; .302 *

① 達成志向

家族の達成志向に関与する家族成員の自我状態は、父親の CP・AC・NP、母親の NP、私の A・CP の 6 変数であった。そのうち、偏相関係数の有意であったものは、父親の CP ($p < .001$)、父親の AC・NP ($p < .05$)、母親の NP ($p < .01$)、私の A ($p < .01$) であった。虚無的で非建設的な人生観や自他否定的な態度の父親 (CP・AC と正の相関、NP と負の相関)、母親の他人への配慮のなさや他人に無関心でいられる態度、男子青年の合理的で理性的な態度が、家族の達成志向を高めると思われる。

② 知的志向

知的志向を説明するのに有効な家族成員の自我状態を抽出すると、父親の AC・A・NP・FC、母親の FC・AC、私の NP・A・FC の 9 変数となった。父親の AC (正の相関 $p < .001$)、父親の A (正の相関 $p < .01$)、父親の NP (負の相関 $p < .05$)、母親五 FC (負の相関 $p < .05$)、

私の NP が有意な偏相関係数を示した。家族の知的志向の雰囲気醸し出すのは、父親の徹底した理性的、合理的な発想、母親の他人への無関心さ、男子青年のやさしさと考えられる。

③ 葛藤表出度

家族の葛藤表出度に関する家族成員の自我状態として、父親の CP・A、母親の A・CP、私の AC が選択された。家族の葛藤表出度には、母親の CP (正の相関 $p < .001$)、母親の A (負の相関 $p < .05$) が特に関与しているといえる。父親のワンマンさと母親の非合理的で感情的な態度が葛藤表出度を高める。

④ 凝集性

家族の凝集性には、男子青年の NP・A が関与している。男子青年の適切な人への関りと援助が家族の凝集性を高める。

⑤ システム維持力

家族のシステム維持力には、父親の NP (負の相関)、母親の NP (正の相関)、私の CP・A (正の相関) (いずれも偏相関係数の有意水準 $p < .05$) が関与している。

⑥ 感情表出度

F 値による変数選択と偏相関の有意性から、家族の感情表出には私の NP が関与しているといえる。

⑦ 社交性

F 値による変数選択と偏相関の有意性から、家族の感情表出には私の NP が関与しているといえる。

ま と め

1. 重回帰分析結果からみた家族環境と家族成員の関係

重回帰分析において家族成員個々人のパーソナリティ構造(エゴグラム)および父親・母親・青年全員のパーソナリティ構造と家族環境の下位尺度とどの程度の間接性を持ち、どの程度の説明力があるのかを検討した。

(1) 父親と家族環境 (父親の影響をもつ家族環境)

女子青年の家族と男子青年の家族とを比較してみると、家族環境のうち相対的には、女子青年を含む家族では、父親が家族の凝集性、システム維持力、社交性、葛藤表出度に影響力をもつものに対して、男子青年を含む家族では、達成志向、葛藤表出度、感情表出度に影響力を強くもつ。女子男子を問わず青年を含む家族は、父親の現実認識の悪さ、独断や偏見によってかわろうとする態度が家族内の葛藤表出度を高めている。女子青年を含む家族では、家族の凝集性と家族のシステム維持力の高低は、父親が娘に規則と優しさの両刀づかいでかわるかどうかに関係している。また、社会的・娯乐的活動志向にも父親が影響力をもつ。

一方、男子青年を含む家族では、父親は家族の達成志向に最も関与し、父親の厳しく過保護

にしない態度の有無がそれを決める。女子青年を含む家族の父親は、家族のリーダーとして家族成員をまとめ問題が生じないように護ってくれる親として位置づけられ、男子青年を含む家族の父親は、子どもを競争社会へ出し自立させる役割を家族のなかでもっているようである。

そうしたことから、女子青年の家族の父親は、男子青年の家族の父親に比べて、青年をより発達段階の前段階のすなわち子どもっぽく扱っている家族形態の役割を担っていると推測される。

(2) 母親と家族環境（母親の影響をもつ家族環境）

女子青年の家族では、家族環境のうち相対的には、母親がシステム維持力、達成志向、葛藤表出度、などに影響力を強くもつ。男子青年は、母親の家族環境への寄与を達成志向のみに認めている。

女子青年の家族では、母親が父親同様家族システムの維持については影響力をもつ。達成志向にも強い影響力をもつが、それに関与している自我状態をみるといわゆる世間体や見栄を重んずることと関係し、本来の意味での子どもの自立や社会化を促進することへの影響ではないように思われる。葛藤表出度も父親と同様影響力が強い。葛藤表出度に現実認識の歪みがある点では父親母親同じであるが、父親の場合は独断や偏見の押し付けが関与するのに、母親の場合は人との交流を避けたり協調的でなかったりすることが関与する。また、感情交流のある雰囲気づくりに母親は関与している（父親は、家族員の相互援助の関係を築くのに関与しているといえる）。さらに、女子青年を含む家族での特徴は、母親の AC（順応した子どもの自我状態）が、すべての家族環境下位尺度に有意に関与することである。

男子青年を含め家族では、両親とも達成志向に影響力をもち、しかも父親と同じようなパターンの自我状態が関与している。

(3) 青年自身と家族環境（青年の影響をもつ家族環境）

女子青年の家族では、女子青年自身が家族の感情的な交流に対して影響力をもつことは他の尺度に比して少ない。

男子青年を含む家族では、青年自身が家族の凝集性、感情表出度、知的志向、システム維持力に関与し、他の構成員である父親や母親よりも青年自身が家族環境の多方面に影響力をもち、特に、男子青年の親的自我状態の発達度が家族環境を変えるようである。

2. 主要な家族成員（父親・母親・青年自身）全員のエゴグラムと家族環境

女子青年の家族の場合、最も説明力があつたのはシステム維持力であつた。家族成員皆の CP が深く関与していた。感情表出度が最も説明力に欠ける。全体的にみると、母親の CP と AC、父親の CP・NP と FC、女子青年の CP と FC が家族環境に影響力をもっていた。

家族環境に関与する家族成員のエゴグラムを分析するという探索的な調査ではあつたが、一応解釈可能な分析結果がえられた。

文 献

- Bloom, B. L., 1985 A factor analysis of self-report measures of family functioning. *Family Process* Vol. 24 225-239
- Moos, R. H. and Moos, B. S. 1981 *Manual for the Family Environment Scale*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologist Press.
- 永田忠夫 1985 女子青年の自我同一性混乱に関する家族環境要因・小学生以降の親の養育態度
愛知県立看護短期大学雑誌 17号 97-111
- Olson, D. H., Russell, C. S., & Sprenkel, D. H. 1983 Circumplex model of marital and family systems.
Family Process Vol. 22 69-83
- パトリック J. カーンズ (野田雄三・竹内吉夫/訳) 1987 *ファミリー・コミュニケーション* 現代社
- 佐藤悦子 1986 *家族内コミュニケーション* 勁草書房
- 杉田峰康 1985 *講座サイコセラピー：8 交流分析* 日本文化科学社
- 柳井晴夫ら 1986 *多変量解析ハンドブック* 現代数学社